

教師の断言

東京近郊を走るJ.Rの新型車両にテレビが設けられ、最近は「きょうの運勢」が流れるようになった。満

員電車ではほかに見つめるものもないから、通勤客はその画面を否応なしに見させられる。ああ、迷いの世よ、と嘆かざるをえない。

そんな思いから、前号でも紹介した某大学の「日本語作法」という授業で、冬休みの宿題に「人間の運命はあらかじめ決まっているか」という作文を書かせてみた。出題に当たっては、こんな注文を付けた。

《古いなどで、運命は予測できるものだろうか。「未来は何らかの形で

南無
善財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

決まっている」とする「決定論」について、あなたはどうか考えるか。日ごろの体験から書き始め、途中で逆の見方も紹介し、最後に自分を強く主張したい。八百字前後で》

初もうでや成人式の季節だったので、若者に私なりのメッセージを伝えたくもあった。野球少年だったP君のこんな作文に出合うと、「がんばれよ」と肩を叩きたくもなる。

《朝のテレビでは「何をやっても失敗する」との予想だった。気になっ

ていたが、試合が始まると気持ちを切り替え、強気で打席に入った。初球は高めのボール球だったが、バットを思い切り振った。打球は外野手の頭上を越えて、ランニング・ホームランになった》

しかし、自信がなくて、ふらつく迷走型が圧倒的に多かった。「信じないし、信じたくもない」と力強く書き出しながら、途中で「やはり気になって、古い番組を見てから登校する」となってしまう。「運命は決まっていない。仮に決まっていなくても、自分で変えていけるはずだ」といった文章もあったが、変えられるものなら決まっていはいはずで、その矛盾に気付いていない。

サッカー選手のQ君は、番狂わせ

で勝った試合を振り返って《両チームの力の差を超える大きな運命が、我が校を勝利に導いた》と書いてきた。しかし、評判がもともと違っていたか、相手が油断したか、というだけではないか。原稿用紙の余白に「数学も理科も学んできたにしては甘いなあ」と朱書して返した。

占いなどが怪しいことは、大学生なら、いや、小学生でも感じてはいる。しかし、確信までに至っていない。どこかに不安が残っている。この小さな迷いが、いずれオカルトに走らせ、カルトにもつながっていく。だれかが早めに「しっかりとない」と声をかけるべきだろうが、小中学校の「道徳」の授業もほとんど取り上げていない。クラス討論で

もすれば、流れは「おかしい」という結論に向かうはずなのに。

先生たちには「運命なんて決まっていますよ。みなさんには、未来を選ぶ自由な『意思』があるはずですよ」と言い切ってほしいのである。

そうすれば、いつか人生の岐路に立たされたとき、教え子はきつと「そういうえば、担任の先生が『惑わされるな』とおっしゃってたなあ」と思いついてくれるはずである。

しかし、その教師自身は大丈夫なのか。たとえば、彼らの通勤用マイ

カーには、どこかの神社仏閣で求めた御守りがぶら下がっていないか。

そんなことでは、いくら「占いは迷信」と教えても子どもたちは信用してくれない。何よりも、断固として語るには、教師が哲学や宗教を日ごろ学んでおかなければならない。自分自身の思想を深めなければ、強く言い切ることはできないものだ。

親鸞聖人の教えなどを少しは学んできた私としては、未熟ながらも何とか学年最後の授業のレジュメにこう書くことができた。

《あいまいな思考では、文章も支離滅裂になる。書くことで自分が強くなることもあるから、これを機に「占い番組は見ない」と宣言してみよう。表現も力強くなるはずだ》

